

聖書：創世記 14：1～24

説教題：いと高き神より祝福あれ

日時：2023年7月2日（朝拝）

前回、アブラムの甥のロトがソドムの町を選んで、そこに移り住んだことを見ました。アブラムとロトは持ち物が多くて一緒に生活することが難しくなっていました。そこでアブラムはロトに、どの地に住むか先に選ばせました。ロトは目に見えるところに従って判断し、良く潤っているヨルダンの低地全体を選び、その中のソドムという町に住みました。しかしそのことが今日の箇所です。裏目に出ます。ソドムの町は大変な戦いに巻き込まれます。

1 節にある「シナルの王アムラフェル、エラサルの王アルヨク、エラムの王ケドルラオメル、ゴイムの王ティデアル」は今日のイランやイラクといった東側の国の王たちです。そのリーダーは 4～5 節から分かりますようにケドルラオメルでした。この彼に 2 節の「ソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アダマの王シンアブ、ツェボイムの王シェムエベル、ベラすなわちツォアルの王」といった塩の海つまり死海周辺の王たちが背きます。そこでケドルラオメルを頭とする連合軍が征伐するためにやって来たわけですから。その途中経過も詳しく記されています。連合軍は 5～6 節に記されているヨルダン川東側の人々を北から順に打ち破り、南のアカバ湾の付け根エル・パラシムまで進みます。その後、引き返して北西へと進んでカデシュに至り、カナンの地から見て南西の人々を打ち破って後、いよいよ死海周辺の町々にやって来ます。ソドムの王ら 5 人の王たちは迎え撃ちますが、あえなく惨敗。彼らは命からがら逃げ延びます。11 節にある通り、ケドルラオメルをリーダーとする東方の国の連合軍は「ソドムとゴモラのすべての財産とすべての食糧を奪って」行きました。そしてその中にはロトとその財産も含まれていたことが 12 節に記されています。ロトは持ち物を全部奪われたところか、彼自身捕虜として東の国へ連れて行かれるという最中にありました。目で見えるところから判断することが何と危うい道であるかを改めて思われます。表面的な美しさ、華やかさ、豊かさに引き寄せられた結果はこうであったということです。

さてこの知らせがアブラムの耳に届きます。皆さんがアブラムだったらどうするでしょう。ロトは自分中心の考えで、あの低地の町を選んだのだから自業自得だと言っ

て、そのまま放置するでしょうか。ところがアブラムはこれを聞きつけるとロトを救出するため、直ちに追跡を開始します。少なくとも 75 歳は過ぎていたアブラムでしたが、訓練された者 318 人を引き連れて出発します。またヘブロンで盟約を結んでいたアモリ人マムレ、エシュコル、アネルも一緒に戦いに出ます。その結果、アブラムは見事な勝利を治めました。彼らは約束の地の北端ダンまで追跡し、さらに夜襲を仕掛け、ダマスコの北にあるホバまで追跡します。そしてついにすべての財産取り戻します。親類のロトとその財産、それに女たちや他の人々も取り戻しました。この地一帯で連戦連勝したケドルラオメルの連合軍を少数のアブラムたちが打ち負かしたわけです。驚くべき成果、また記念すべき勝利でした。

さて今日の箇所では重要なのは、その後の 17 節以降の部分です。劇的な勝利を収めたアブラムに二人の王が近づいて来ます。初めにやって来たのはソドムの王でしたが、それに割って入るかのようにサレムの王メルキゼデクとアブラムのやり取りが先に記されます。このメルキゼデクとはどんな人でしょうか。サレムとはエルサレムのことのようにです（詩篇 76 篇 2 節）。またサレムは「平和」を意味します。またメルキゼデクは「義の王」を意味します。その彼はパンとぶどう酒を持って来ました。これは戦いを終えたアブラムをねぎらい、その肉体的な必要を満たすためでしょう。この彼について「いと高き神の祭司であった」と 18 節にあります。彼はもちろんイスラエル人ではありません。まだアブラムの話を見ている段階ですからイスラエル人は存在しません。ですから彼はカナン人であったと考えられます。しかしその彼が「いと高き神の祭司」と呼ばれ、この後を読むとアブラムと同じ信仰に立つ人のように思われます。それどころかアブラムにまさる立場にある人であることがこのあと言われます。非常に神秘的です。どうしてこういう人が存在していたのか私たちには明らかにされていません。そういう人を神は備えておられました。

その彼はアブラムに二つのメッセージを 19～20 節で語っています。一つは「いと高き神、天と地を造られた方より、アブラムに祝福あれ！」ということです。彼はアブラムにパンとぶどう酒を持って来たこととセットで神からの祝福を祈っています。これがどんな祝福であるかは特定されていません。大事なことは、いと高き神、天と地を造られた方からの祝福があるように！と祈ったことです。もう一つは 20 節にある通り、「この神に誉れあれ！」ということです。アブラムに勝利を与えてくださったのは、この神である。この神に栄光が帰されるように！この神こそが賛美されるよう

に！と彼は言いました。

アブラムはこれにどう応答したでしょうか。彼はすべての物の 1/10 を与えたとあります。これはどういう意味でしょう。これについてはヘブル人への手紙 7 章が参考になります。7 章 1~4 節：「このメルキゼデクはサレムの王で、いと高き神の祭司でしたが、アブラムが王たちを打ち破って帰るのを迎えて祝福しました。アブラムは彼に、すべての物の十分の一を分け与えました。彼の名は訳すと、まず「義の王」、次に「サレムの王」、すなわち「平和の王」です。父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっているのです。さて、その人がどんなに偉大であったかを考えてみなさい。族長であるアブラムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えました。」また 7 節：「言うまでもなく、より劣った者が、よりすぐれた者から祝福を受けるものです。」まさに今日の箇所が出来事の意味を語っている言葉です。ここにある通り、アブラムがメルキゼデクに 1/10 を与えた行為は、アブラムがメルキゼデクを自分に勝る方として認めた、そのように敬ったという意味を持つ行為でした。アブラムは 12 章冒頭に記されていた通り、全世界に対して神の祝福の仲介者となるべき存在でした。しかしアブラムはそういう自分をさらに神に仲介する人としてメルキゼデクを認めました。アブラム自身、祭壇を築いて神に礼拝をささげる祭司的な働きをしていた人ですが、その彼はメルキゼデクを自分に勝ると高き神の祭司と認め、敬いました。ヘブル書はこの点においてメルキゼデクはキリストの予表であると述べています。メルキゼデクが系図もなく、忽然とここに現れている神秘性はキリストと関係します。普通、祭司は系図が大事です。それは世襲制だからです。しかしキリストはそのような普通のレビ族の祭司職に位置付けられる方ではありません。なぜならキリストはただお一人でこの働きを完成されるお方だからです。ご自分の命という尊い代価を払い、一回限りの完全ないけにえをもって贖いを成し遂げ、復活し、永遠に祭司の働きをされる方だからです。そのようなイエス・キリストをメルキゼデクは前もって示す型だったというのです。もちろんアブラムはメルキゼデクの内に今日の私たちが知っているのと同じようにキリストのすべてを見ていたわけではありません。しかしアブラムはメルキゼデクの内に、自分にはるかにまさるとりなし手を見たのです。彼がパンとぶどう酒をもって必要を満たしてくれたこと、また神からの祝福こそを祈ってくれたこと、そしてアブラムに勝利を与えたのは神であって、その神にこそ栄光は記されるべきであると言ってくれたこと。その彼の内に自らにまさる神が立てたもう

特別な祭司の存在を認め、へりくだったのです。そしてこのまことの祭司を通して神が与えてくださる祝福に望みを置いたのです。

さて、その後でもう一人の王、ソドムの王がアブラムに近づきます。彼は先のメルキゼデクと対照的です。メルキゼデクは贈り物をもってアブラムを祝福するために来ました。それに対してソドムの王はどうだったでしょう。彼の最初の言葉は原文を見ると「返せ」という言葉です。まず言ったのが「私に返せ」。これが助けてもらった人が最初に言う言葉でしょうか。まず感謝の言葉から始めるべきではないでしょうか。また感謝のしるしとして贈り物を持って来るべきではないでしょうか。しかし彼は手ぶらで来ました。かつ「返せ、私に、人々を！」と要求しました。その後で「財産はあなたが取れ！」と言います。一見、財産を全部取って良いと言うのは寛大であるようにも思われます。しかしなぜ彼が主導権を取るのでしょうか。アブラムは今、ケドルラオメル連合軍を打ち破った人として、いわばこの地一帯における王の王です。財産だけではなく、人々についてもアブラムが権利を持っています。なのになぜソドムの王が勝手に話を進めるのでしょうか。ソドムについては前回見た 13 章 13 節に「邪悪で、主に対して甚だしく罪深い者たちであった」とありましたが、まさにその民の王らしい姿です。

アブラムはこれに対してどう応答したのでしょうか。ある意味でソドムの王の提案は魅力的です。図々しい相手であるとは言え、彼に合意すれば財産全部を自分のものにできます。しかしアブラムはこれを拒否しました。彼は言いました。「私は、いと高き神、天と地を造られた方、主に誓う。糸一本、履き物のひも一本さえ、私はあなたの所有物から何一つ取らない。」なぜでしょうか。彼は言います。「それは、『アブラムを富ませたのは、この私だ』とあなたが言わないようにするためだ」と。すでにソドムの王の邪悪さははっきりしています。その彼の提案を受け入れたら、確かに莫大な財産を手にするにはなりますが、それはソドムの王の下に入るようなこととなります。その結果、アブラムの祝福に関して主ではなくソドムの王に栄光が帰されることになりかねません。ソドムの王が「アブラムがあのように豊かなのは私のおかげだ」と主張しかねません。それは誤った道を行くことだとアブラムは判断しました。これはある意味でエデンの園における悪魔の誘惑と同じです。サタンは手っ取り早く木の実を食べて神になったら？と提案しました。あるいはイエス様の荒野における誘惑も同じです。サタンは「ひれ伏して私を拝めば、この世の王国と栄華を全部与える」と

言いました。アブラムはそれと同じものを見て退けたのです。そして私は主から来る祝福だけを受ける。そのために待つことが必要ならなお待つ！という態度を取ったのです。ここで注目に値するのは、アブラムの 22 節の言葉はメルキゼデクの 19 節の言葉と同じであることです。「いと高き神、天と地を造られた方より祝福あれ」と祈ったメルキゼデクの言葉を受けるようにして、アブラムは主について「いと高き神、天と地を造られた方」と言いました。つまりメルキゼデクの言葉を聞いて、アブラムはその神への信仰に堅く立たされ、強められたのです。それによって神から来るのではない祝福を見分けることができ、また退けることができたのです。彼は最後の 24 節で「若い者たちが食べた物と、私と一緒に行動した人たちの取り分は別だ。アネルとエシュコルとママレには、彼らの取り分を取らせるように。」と言います。時々、自分の確信ゆえに他の人にも同じことを強いる人がいますが、それは度を越えたあり方であり、配慮のないあり方です。自分は自分の確信に立って行動すれば良いですが、他の人にそれを強制してはいけません。他の人には正当な分け前を！とアブラムは言いません。

以上の箇所からまとめとして二つのことを述べたいと思います。一つは私たちは罪を犯した時ばかりでなく、立派な行いができた時にも贖い主を必要としているということです。今日の箇所のアブラムは立派でした。ロトを救出するため、兄弟愛によって、多くの労苦をささげて、この地一帯の王に打ち勝つという見事な成果を収めました。しかし私たちが心に留めたいことは、そういうアブラムがメルキゼデクを自分に勝る神の祭司として認めて 1/10 をささげ、その前にへりくだったということです。仲介者が必要なのは私たちが罪を犯した時だけではありません。私たちの最高の行いさえも神の前には傷あるものであり、汚れているものです。アブラムは立派な働きをした後でもメルキゼデクの前にへりくだり、彼によってとりなしてもらい必要のある自分であることを認めました。そして神からの祝福を祈ってもらうと同時に、もし自分に何らかの良いものがあるなら、それは主のおかげであると主に栄光を帰しました。私たちも同じです。最も良い歩みをした時、素晴らしい働きができたと思う時も、私たちはキリストの執り成しを必要とする者たちです。そのことを思って、いつもキリストの前に身を低くし、キリストの執り成しにより頼む者でありたいと思います。そして何らかの良いことが見られた場合は、それはただ主のおかげであるとして主にすべての栄光を帰す者でありたいと思います。

もう一つは私たちの前にも今日見た二つの道がいつもあるということについてです。その一つは今日の箇所メルキゼデクが指し示すキリストの執り成しを通して神からの祝福を受けるという道であり、もう一つはソドムの王が差し出す、神から出たのではない、いわばこの世の祝福に飛びつくという道です。キリストを通して神がくださる祝福の中にはメルキゼデクがパンとぶどう酒を持って来たように、今ここでの私たちの必要を具体的に満たしてくれるという祝福も含まれます。しかしこの神からの祝福はたいていすぐ手に入るものではありません。ここでアブラムはメルキゼデクによって「アブラムに祝福あれ」と祈ってもらいましたが、それで何かはすぐ手に入ったわけではありません。この神の祝福に十分あずかるためにはまだ多くのプロセスが必要とされています。なお忍耐をもって神の時を待つことが求められます。その一方、ソドムの王が差し出す祝福は今すぐ手にできるものです。ですから私たちはそういう祝福には注意をしなければと思います。安易な道、手っ取り早い道は危険です。ある人は、もらえるものはもらっておけば良いのでは？そしてそれを神のためにうまく活用すれば良いのでは？と思うかもしれませんが、そうではありません。今日の箇所は、私たちの前に差し出されても退けるべきものがあるということを教えています。それが神が差し出している祝福でないなら、また神の栄光につながらないものなら、それに手を出すべきではない。その判断は難しいところがあると思います。アブラムはそれを見分けるために、メルキゼデクの「いと高き神からこそ、祝福を受けるように」というとりなしの言葉を必要としました。ですから私たちもいつもキリストのもとに行き、キリストの言葉に聞き、キリストを通して神が与えてくださる祝福を何よりも求め、待ち望む者でありたいと思います。すぐ手に入るが、神の祝福とは異なるものに心が引かれたり、それに手を出すことがありませんように。たとえ時間がかかっても、いつまでも残る、いと高き神から来る祝福こそをキリストにあって求め、それに豊かに生かされるアブラハムの子孫、神の民の歩みを導かれて行きたいと思います。